

「またやりたい！」を育てたい

—大人になっても体を動かしたいと思えるような体育の授業づくり—

浦野 裕之 高度教職開発コース 教科授業力高度化プログラム

キーワード：その運動にしかない面白さ，動感，見通し，安心して学べる場

1. 研究の背景

豊かなスポーツライフの実現は，多様な人々を結び付けたり，生活を健康で活力に満ちた楽しく明るいものにしたりする。学校の体育の授業においては，生涯にわたって運動やスポーツに親しむ資質，能力を育成することが求められている。しかし，筆者のこれまでの授業を振り返った時，マット運動で技に取り組めずにいる子や，バスケットボールでどう動いたらよいか分からずに立ち尽くす子の姿があり，この子たちが大人になっても体を動かしたくなるような授業になっていたのか，疑問が残った。

3年生のD児は，鉄棒運動の授業に1回目だけ参加し，それからは参加することができなかった。体育の授業がある日でも運動着を着て来ないことがあり，運動には前向きになれずにいる様子であった。そこで，本研究では，D児が「またやりたい！」と思えるような体育の授業づくりという視点で授業実践を行い，D児の姿を分析することを通して，どうしたら運動やスポーツが楽しいと思える授業が実現できるかについて明らかにしていくこととする。

実践の結果から，その運動にしかない面白さを味わうために教材や課題を工夫することで，運動の楽しさを感じられるということが示された。また，今まで感じたことの無い動感を得ることで，運動への見通しを持つことができるということも確認された。さらに，「安心して学べる場」を保障することが，子どもの追究を支えるということが明らかになった。

2. その運動にしかない面白さを味わうことで運動の楽しさを感じたD児

2.1 やってみようと思えるような課題（3年クロスカントリースキー）

大会のためにひたすら滑らされるだけの授業。技術面の指導がなく，上達を感じられない授業。クロスカントリースキーが楽しいと思える場面が少ない授業。タイムを計ることや競争をすることで他の人と比べられ，劣等感を感じる授業。こんな授業を経験した子どもたちは，「クロスカントリースキーは辛かったイメージしかない」「クロスカントリースキーの楽しさが分からない」「大会に出なければいけないのが嫌だった」と感じ，大人になってもクロスカントリースキーをしたいとは思わなくなってしまう。

大人になってもクロスカントリースキーをしてみたいと思える子を育てるためには，ク

ロスカントリースキーにしかない面白さに触れる授業が必要である。クロスカントリースキーにしかない面白さを「普段移動しにくい雪の上を楽に移動することができること」「スキーとストックを使ってリズムよく滑れると楽しいこと」「重力を利用して坂を滑り降りるのが楽しいこと」と捉え、これらを感じられる授業を構想した。

重力を利用して坂を滑り降りる楽しさを感じてほしいと願って「スキーで坂を登ったり下ったりできるかな？」という課題を授業の中で設定した。子どもたちは校庭の周辺で、小さい坂や大きい坂、緩やかな坂や急な坂など、自分が挑戦できそうな坂を見つけて、思い思いに上ったり下ったりする姿が見られた。

D 児はこれまで、スキーに苦手意識があるように見えたが、自分から、上り下りできそうな、短い坂を見つけて、何度も上ったり下ったりすることに挑戦していた。



また、普段移動しにくい雪の上でスピードを上げて移動できる面白さを感じてほしいと願い「しみわたりを楽しもう」の課題を授業の中で設定した。「しみわたり」とは雪が解けたり凍ったりすることを繰り返したあとのよく冷えた日、カリカリに固くなった雪の上を滑ることである。この授業では、学校の近くの田んぼの上で、スピードを上げて楽しそうに滑る子どもたちの姿が見られた。D 児も、カリカリに固くなった雪の上に乗って、滑る感じを楽しんでいた。これまで「スキーはうまくできそうにない。」と感じていた D 児にとって、スキーにしかない面白さを味わうためのこれらの課題は「できる・できない」に焦点が当たりやすく、「やってみよう。」と思うことにつながったと言える。

2.2 子どもの力量に配慮した、やさしい教材づくり（3年ダブルゴールサッカー）

岩田（2016）は、「大人のために創られた技能的にも行動的にも複雑で高度なゲームを、子どもの力量への配慮なしに提供すれば、得意な子供だけが独占的にボールを支配する様相になりかねず、多くの子どもたちがゲームの面白さから絶縁した活動を強いられる状況を生み出してしまう。」と述べている。

バスケットボールでどう動いたらよいか分からずに立ち尽くしてしまった子にとって、バスケットボールは、判断しなければならぬ状況が多すぎた。また、走りながらのドリブルやパス、シュートなど、難しいことをしなければならず、この子にとって極めて難しいゲームになってしまっていた。そして、このゲームの面白さに触れられていなかったと反省した。

学習指導要領において、バスケットボールはボール運動の「ゴール型」ゲームに分類される。そこで、「ゴール型」ゲームの面白さを「シュートに結び付くチャンスづくりに向けての協働的プレイをすること」と捉え、ボール運動が得意ではない子でも、この面白さを味わえるように、岩田（2016）が考案した、ダブルゴールサッカーをもとに授業を構想した。このゲームは2つの「ゲート」と2つの「ゴール」をめぐって2対1で攻防するものである。攻撃側と守備側が入り混じらないため、仲間とチャンスを創ることに向けて安心してプレイできる良さがある。また、ボールは、足でのボール操作を容易にするため、

「滑らせるボール」ミズノ「キックルパッド」を使用した。

D 児は、攻撃の場面で、相手の動きを見ながら、ボールをシュートするのか、パスするのか判断してキックしようとしていた。また、守備側を惑わすように、フェイントを入れる動きも多く見られた。さらに、ゴールを決めた時には、笑顔を見せて喜ぶ姿もあった。



シュートするのかパスするのかという判断をするための時間が確保されていたこと、攻撃側が守備側に直接邪魔されずに安心してプレイすることができたことにより、D 児がダブルゴールサッカーにおける、「シュートに結び付くチャンスづくりに向けての協働的プレイ」の面白さを感じることはできたと言える。

3. 今まで感じたことのない動感を得ることで、運動への見通しが持てたD児（3年跳び箱運動）

渡辺（2008）は、「子どもが意欲をもって運動に取り組むためには、『なじみの地平』に誘い込むための易しい教材づくりが必要になる。」と述べている。これをもとに D 児がなぜ鉄棒の授業に参加できなかったのか説明すると、どう動いたら良いかの見通しがもてず、運動になじめなかったからだと言える。

3年生の跳び箱運動の授業に T T で入らせていただく機会を頂いた時のことである。D 児は自分の番が来ると、開脚とびに挑戦してはいるものの、跳び箱の上に手をつき、踏切った後、跳び箱の手前の方にまたがってから、降りることを繰り返していた。なんとなく跳び箱に向かうその姿から、跳べそうな見通しが持っていないのではないかと筆者は感じた。

そこで、筆者は、跳び箱の横で、D 児が跳び箱を跳ぶときに、D 児の脇の下と太ももの裏を支えて補助をした。1度目は、補助されることに不安があり、恐る恐る跳んでいるように筆者は感じたが、D 児は一人で跳んでいた時よりも遠くにおしりを着いた。2度目は1度目と同じような位置におしりを着いたが、D 児の踏切が強くなったことで、筆者が補助したときの手ごたえは軽く感じた。補助したのはこの2度だけだったが、D 児はその後、額に汗をかきながら、自分から何度も跳び箱に向かっていった。

このことから、D 児は今までに感じたことのない動感を得たことにより、「跳べるようになるかもしれない。」と思ったのではないかと推察される。これは、D 児が運動への見通しを持てた姿だと捉えることができる。

4. 安心して学べる場で運動に向かっていく姿へと変容していったD児（4年鉄棒運動）

D 児が昨年の鉄棒運動に参加することができなかった理由を考えた時に、運動への見通しが持てなかったことに加えて、失敗するところを友だちに見られることが気になって、取り組めなくなっていたのではないかと推察した。

そこで、鉄棒の授業づくりにあたり、D 児が安心して学べる場として、高さが低い鉄

棒を用意した。また、落下しても痛くないように、鉄棒の下にマットを敷いた。さらに、少しずつ達成感を味わうことができるように、簡単な課題から順番に取り組むようにした。そして、技が「できる、できない」を問題にせず、自分の動感を更新することを目標に、2人回り（シンクロ）も取り入れながら授業を構成した。その上、子どもたちに楽しく取り組んでほしいと願い、体育館を「忍者村」に見立て、「鉄棒忍者村」として単元を構想した。

D 児は「前回り」の下位教材である「ふとんほし」の技に挑戦したが、なかなか頭を鉄棒より下に下げられずにいた。鉄棒から降りてからは、お腹が鉄棒に当たって痛かったようで、お腹を押さえていたが、その後の挑戦では、鉄棒をおへそより下に引っ掛けられたことで、頭を鉄棒より少し下に下げることができた。D 児は自分が並ぶ列に戻るとき、おへその下あたりをしきりに触って、鉄棒を引っ掛ける位置を確認していた。その姿から「ここに鉄棒を引っ掛けたらうまくいきそうだ。」という確かな手ごたえを感じているように見えた。その後、何度か挑戦を繰り返し、頭を鉄棒よりも下に下げることができた。



そして、D 児は H 児と二人で前回りをする場面で、H 児と動きを合わせようとすることで、初めて前回りをする事ができた。D 児はその後 H 児と一緒に前回りを何度も成功させていった。単元の終盤には、同じグループの友達と4人で回ることを楽しむ D 児の姿があった。



D 児は、安心して学べる場でどうやったら上手くいくか考えながら何度も挑戦することを通して、自分にとって回りやすい鉄棒を引っかける位置を見つけ出した。そして、頭を鉄棒の下に下げて逆さになる感覚を掴んだことで、「回れそうだ」という見通しを持つことができた。このことから、安心して学べる場は子どもの追究を支えるということが示された。

5. おわりに

大人になっても体を動かしたくなるためには、運動やスポーツが楽しいと思える経験を通して、運動やスポーツを肯定的に捉えることが必要不可欠である。運動やスポーツを楽しめるものだと感じた子どもは、大人になっても体を動かしたくなるだろう。

文 献

小学校学習指導要領（平成29年告示）体育編 文部科学省

岡野昇・佐藤学：体育における「学びの共同体」の実践と探究（2015）大修館書店

渡辺敏明：学研体育ジャーナル（2008）

岩田靖：ボール運動の教材をつくる（2016）大修館書店